

1. 活用推進者

部署 平成28年度カリキュラム検討委員会
 役職 委員長（専門学校事業本部 常務理事）
 氏名 恵藤 健二



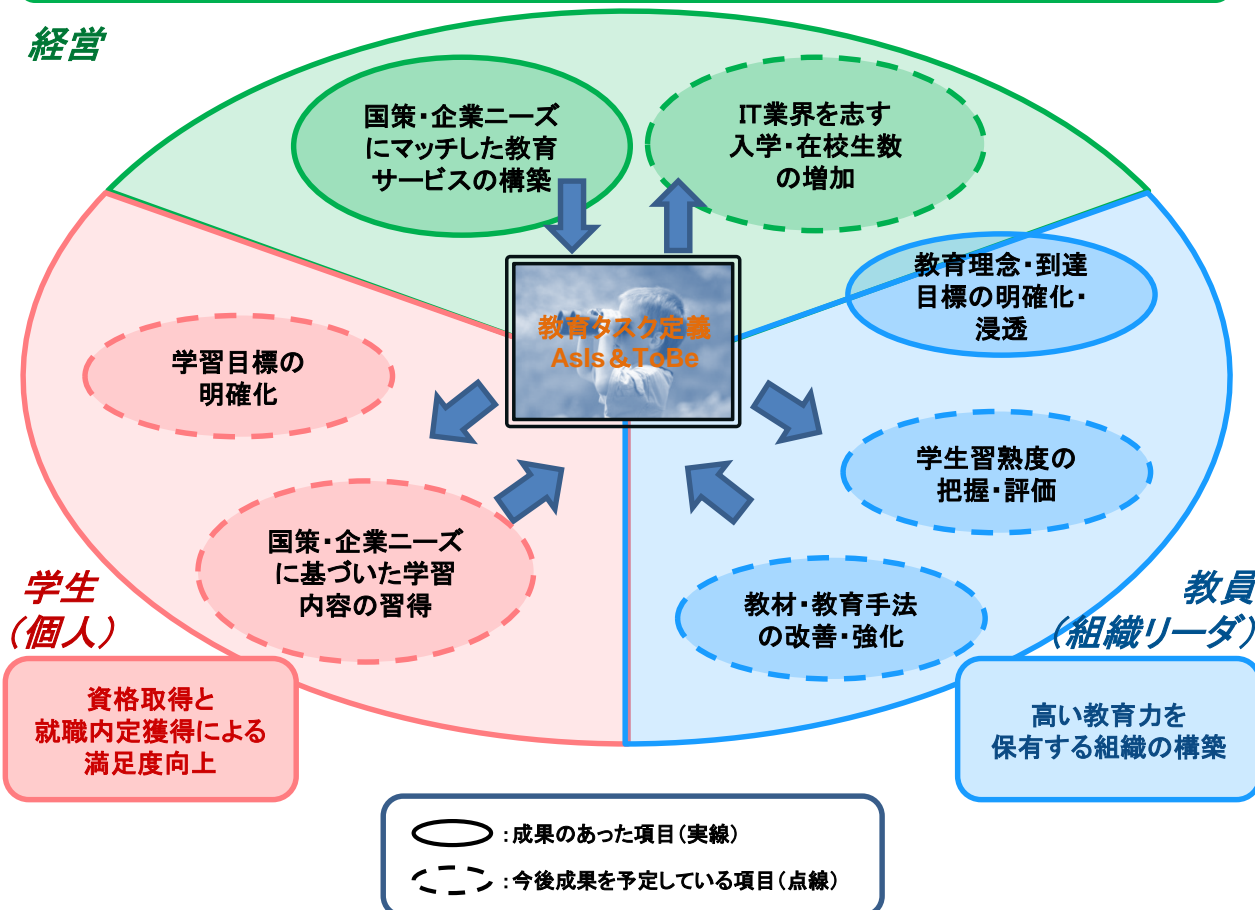
2. 会社概要

- 社 名 : 電子開発学園(全国10校の専門学校)
- 所 在 地 : 北海道、新潟、名古屋、大阪、広島、北九州、福岡、大分、鹿児島
- 設 立 : 1968年(昭和43年)4月
- 代 表 者 : 理事長 松尾 泰
- 資 本 金 : -
- 社 員 数 : 350名

3. iCD取組み効果

国策の推進役を担うとともに情報化社会の進展に寄与

経営



4. iCD取組みの効果及び今後予定する効果内容

4.1. 効果のあった項目	効果内容
国策・企業ニーズに マッチした 教育サービスの構築	「iCD＝国・企業がIT人材に求めるタスクとスキル」との認識のもと、iCDを取り入れたカリキュラムの検討・構築を実践し、ニーズにマッチしたカリキュラムを開発することができた。
教育理念・到達目標 の明確化・浸透	明確な指針(iCD)に基づいて構成されたカリキュラム及び学習到達目標であることが明確となり、教職員は今まで以上に自信を持って教育に臨むことができるようになった。
4.2. 効果を予定している項目	予定している効果内容
IT業界を志す 入学・在校生数の増加	iCDを用いた教育カリキュラムを実践することにより、学生満足度、企業満足度、職員満足度を向上させ、その結果として入学・在校生数の増加による経営の安定・拡大を図る。
学生習熟度の 把握・評価	iCD(主にスキルディクショナリ)を用いた学生評価(到達度の測定)の仕組みづくりを検討する。
教材・教育手法の 改善・強化	iCD(主にスキルディクショナリ)を用いた教材及び教育手法の評価を行い、改善と強化を図る。
学習目標の明確化	iCDを基に開発したカリキュラムで明確となった学習目標を、授業を実践する段階でしっかりと伝達・認識させることで、学習意欲を向上させる。
国策・企業ニーズに 基づいた学習内容の 習得	iCDを基に開発したカリキュラムを実践した成果として、成績向上は勿論のこと、その具体的な証として資格取得と就職内定獲得の向上に努める。

5. iCD活用に対する現場からの評価の声



経営者

iCDを活用したことで様々な発見や気づきがあったほか、カリキュラムでの不足している部分あるいはこれまでの教育内容で間違っていなかった部分もハッキリと見えた。



経営者

今回の検討により、電子開発学園が理念として掲げてきた「国策の推進役」と「情報化社会の進展への寄与」に、また一歩近づいた。



現場リーダー

iCDを用いたことが真剣にカリキュラムを見直す良い機会となったほか、議論を活性化させる大きな要因となった。



現場リーダー

新規に追加された科目、既存を踏襲した科目も含め、そのバックボーンがiCDにより明確となったことにより、自信を持って教育に臨むことができる。

6. iCD取組みの効果

■効果項目：国策・企業ニーズにマッチした教育サービスの構築

「iCD＝国・企業がIT人材に求めるタスクとスキル」との認識のもと、iCDを取り入れたカリキュラムの検討・構築を実践し、ニーズにマッチしたカリキュラムを開発することができた。

2日間×3回の委員会をワークショップ形式で開催し、初回はiCDの勉強会からスタートした。まずは、iCDのタスクディクショナリから、専門学校生が卒業時までまでに習得すべき項目を、有識者・企業委員からのアドバイスを得ながら抽出した。

分野	大分類		
ST戦略	(ST03)IT製品・サービス戦略策定		
DV開発	(DV01)システム要件定義・方式設計	(DV08)Webサイト開発	(DV11)移行・導入
	(DV02)運用設計／(DV03)移行設計	(DV09)システムテスト	(DV12)ソフトウェア保守
	(DV04)基盤システム構築	(DV10)セキュリティテスト	(DV15)プロジェクトマネジメント
MC管理・統制	(MC03)情報セキュリティマネジメント		
CMその他業務	(CM01.8)ソリューションの提案		

【参考資料1】抽出したタスク(大分類)
※実際には中分類、小分類レベルまで抽出

また、抽出したタスクを満たす教育がなされているかの視点で、既存カリキュラムとの対比を行ったところ、教育上の過不足が明確になった。

抽出したタスクから見える育成人材像を定め、iCDのタスク項目を電子開発学園用カリキュラムに再構築(インストラクショナル・デザイン)していく作業を行った。

手順としては、タスク項目毎に教育レベル(知識レベル／実践レベル)を定め、それを5つの教育分野に分類したのち、それらを教育体系として整理(科目の設定や学習順序など)し、新カリキュラム体系として定めていった。



【参考資料2】育成人材像の設定(左側)、iCDタスクの分類と教育体系を検討(右側)

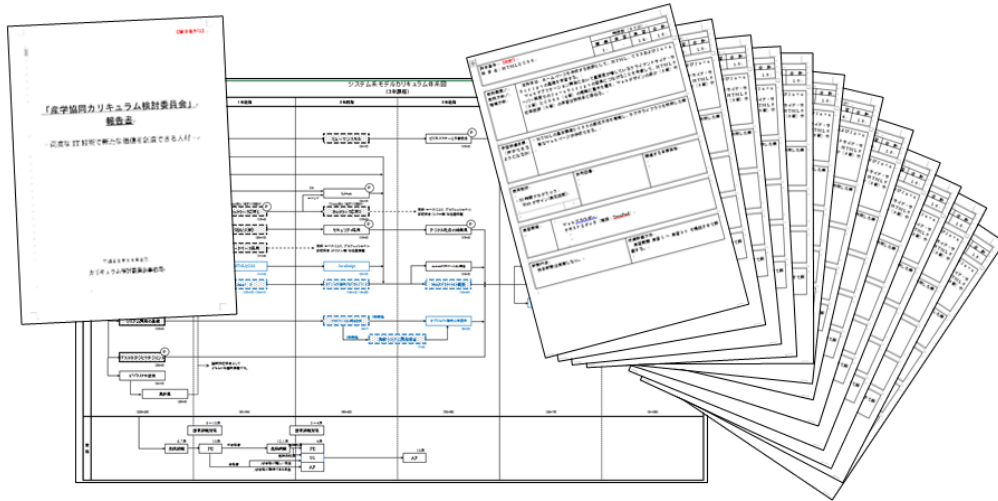
最終的には、13科目分の新シラバス(授業設計書)を開発することができた。

6. iCD取組みの効果

■効果項目:教育理念・到達目標の明確化・浸透

明確な指針(iCD)に基づいて構成されたカリキュラム及び学習到達目標であることが明確となり、教職員は今まで以上に自信を持って教育に臨むことができるようになった。

全校の代表者が一堂に会する全体会議の場で、検討内容の報告と成果物(シラバス)の発表を行った。検討に参加した委員自らが報告・発表を行ったが、どの委員も強い自信を持って、開発を担当した科目の狙いや学習到達目標を説明した。



【参考資料3】成果報告会 配布資料一式(左から報告書、体系図、シラバス)

各校の代表者は、検討報告会の内容を持ち帰って校内への展開を図ったが、その際にも今回の新カリキュラムに対する期待の声が多く挙がっていた。既に平成29年度から、その成果を反映した授業が全校で実施されている。